



カンディンスキーの著作より

アーティゾン美術館は所蔵作品にかかわる図書資料の収集を続けています。

ここでは、所蔵図書の一部をご紹介します。

今回ご紹介するのは、開館記念展覧会「見えてくる光景 コレクションの現在地」

第1部でご覧いただいたカンディンスキー作品に関連する書籍です。

書籍案内

展示書籍3点はいずれも邦訳されています。最も新しい版を以下にご紹介します。

1. 抽象芸術論 芸術における精神的なもの

ヴァシリー・カンディンスキー 『抽象芸術論：芸術における精神的なもの』
(カンディンスキー著作集1) 西田秀穂訳、美術出版社、2000年

2. 青騎士

ヴァシリー・カンディンスキー、フランツ・マルク 『青騎士』
岡田素之、相澤正己訳、白水社、2007年

3. バウハウス叢書 9巻 点と線から面へ

ヴァシリー・カンディンスキー 『点と線から面へ』
(ちくま学芸文庫) 宮島久雄訳、筑摩書房、2017年

2019年からバウハウス100周年を記念して中央公論美術出版より『新装版
バウハウス叢書』(全14巻)が順次刊行されており、9巻にあたる『点と線から
面へ』は2020年4月刊行予定となっています。

本冊子のテキスト作成にあたり上記3冊を参照しました。



ヴァシリー・カンディンスキー 《自らが輝く》1924年 油彩・カンヴァス 69.5×59.5cm
石橋財団アーティゾン美術館蔵

カンディンスキーは抽象絵画の発展に大きな役割を果たした20世紀前半を代表する画家です。革新的な絵画活動を繰り広げる一方で自らの創作の理論を書物に著しました。今回、その中でも代表的な書籍3冊—抽象芸術についての考えをまとめた『芸術における精神的なもの』(1912年)、画家仲間フランツ・マルクと共同編纂した芸術運動の宣誓書『青騎士』(1912年)、教鞭を執っていた造形学校バウハウスでの研究成果をまとめた一冊『点と線から面へ』(1926年)を紹介します。

カンディンスキーの積極的な執筆活動の背景には、彼が創り出す斬新な芸術作品や芸術観について理解を得るために自ら説明する必要があったという事情もあったでしょう。しかし一方でカンディンスキーは、自らが考える新しい絵画の在り方を理論化したいという欲求を抱いてもいました。私たちにとっては、作家自身によって綴られた書物は、残された作品を読み解く大切な手がかりとなる、時を超えた嬉しい贈り物です。

アーティゾン美術館蔵書展示

カンディンスキーの著作より

会期：2020年1月18日(土)–3月31日(火)

会場：アーティゾン美術館 4階 インフォールーム

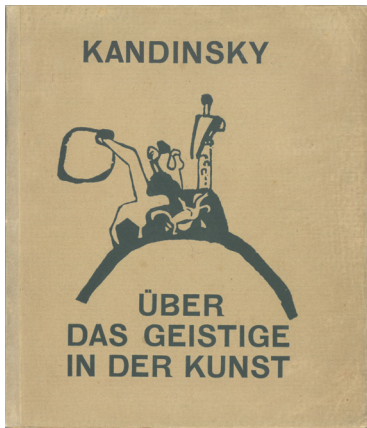
編集・執筆：黒澤美子

公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館

〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2

www.artizon.museum

©2020 Artizon Museum, Ishibashi Foundation



ヴァシリー・カンディンスキー
『抽象芸術論 芸術における精神的なもの』
ピーパー社、ミュンヘン、1912年
Kandinsky, Wassily.
Über das Geistige in der Kunst.
Insbesondere in der Malerei. R. Piper & Co.,
München, 1912
石橋財団アーティゾン美術館蔵

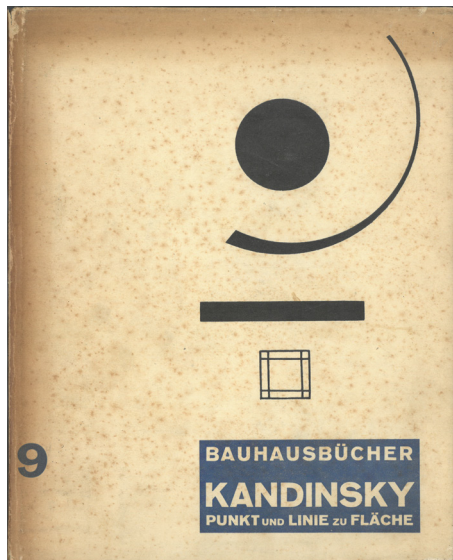
本書は1912年の刊行となっていますが、原稿はその2年前に書き上げられており、実際には1911年12月に出版されています。抽象芸術についての考えがまとめられており、絵画においては自然の外見を模倣するのではなく、内面や精神的なものを表すことが重要だと説きました。とりわけ色彩についての理論を展開することに重きを置いています。「酸っぱい印象をあたえる」色、「撫でたいほどなめらかな、ピロードのような」色、「匂うような色」、「色彩のもつ音程」といったように、味覚、触覚、嗅覚、聴覚と結びつけて色彩の効果を論じている点が独特です。表紙にはカンディンスキーの版画に基づいた図案が印刷されており、山の上に塔と馬、その馬に乗る騎士が描かれています。抽象絵画という新しい絵画ジャンルを切り開く自身を、山の高みを目指す騎士と重ね合わせていたのかもしれませんが。



ヴァシリー・カンディンスキー、フランツ・マルク『青騎士』ピーパー社、ミュンヘン、1912年
Kandinsky, Wassily ; Marc, Franz. Der Blaue Reiter. R. Piper & Co., München, 1912
石橋財団アーティゾン美術館蔵

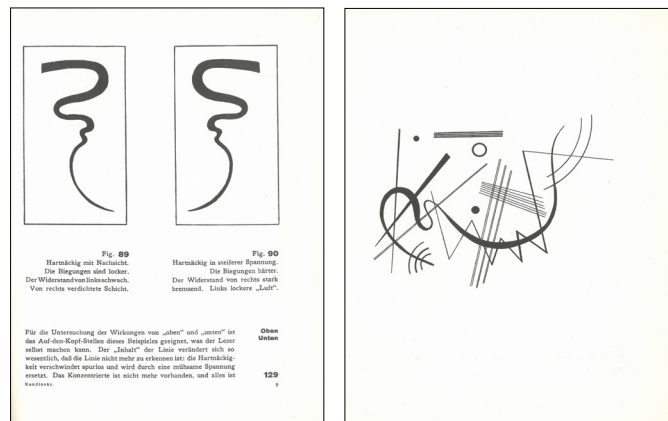
『青騎士』は、カンディンスキーとマルクが共同編集した年刊誌で、彼らの芸術活動「青騎士」の宣言書にあたります。活動としての「青騎士」は1911年の暮れ、『抽象芸術論』の出版と同時期に誕生しています。共通の表現形式を持つグルー

プではなく、本書編集部が企画する展覧会に出品する芸術家たちのゆるやかな集まりとして、新しい芸術の在り方を模索しました。本書には様々な論考が収められていますが、特筆すべき点はその挿絵の豊かさです。西洋美術だけでなく東洋の図像やエジプトの影絵が扱われており、マティスやセザンヌといった美術史上の革新的絵画と分け隔てなく無名の民族的なイラストが散りばめられています。あらゆる地域、時代、ジャンルの芸術を切り離せないものとして総合的にとらえなおすカンディンスキーたちの眼が、本書から見えてきます。表紙はカンディンスキーのデザインによるもので、前足を高く上げた青い馬に乗った騎士の姿が描かれています。二巻目も計画されていましたが、第一次世界大戦の影響もあり実現しませんでした。



ヴァシリー・カンディンスキー
『点と線から面へ』(バウハウス叢書9巻) アルベルト・ランゲン社、ミュンヘン、1926年
Kandinsky, Wassily.
Punkt und Linie zu Fläche. Beitrag zur Analyse der Malerischen Elemente
(Bauhausbücher, vol. 9). Verlag Albert Langen, München, 1926
石橋財団アーティゾン美術館蔵

カンディンスキーは1922年にドイツ・ヴァイマルの造形学校バウハウスで教え始めました。線描や色彩の教育を担当し、色と形の関係について探究を深めていきます。本書はそうしたバウハウスでの研究成果のひとつで、『抽象芸術論』が色彩論に重きを置いていたのに対し、造形論を中心にしています。当館所蔵作品《自らが輝く》が制作されたのは本書刊行の約2年前で、バウハウスで教え始めてからは2年程経った頃にあたります。まさに自らの創作理論を深化させている最中に描かれた作品であると言えるでしょう。本書の図版には《自らが輝く》に書き込まれているモチーフを思わせる形態が複数見られます(下記図参照)。本書で示されているカンディンスキーによる造形の探究が、当館所蔵作品に明確に表れています。



ヴァシリー・カンディンスキー『点と線から面へ』
アルベルト・ランゲン社、ミュンヘン、1926年、p.129
石橋財団アーティゾン美術館蔵

ヴァシリー・カンディンスキー『点と線から面へ』
アルベルト・ランゲン社、ミュンヘン、1926年、p.174
石橋財団アーティゾン美術館蔵